

保育の専門コースを擁する高等学校に於ける 音楽表現の授業実践報告

三沢 大樹, 高橋 セリカ*, 安川 実穂**

A Report on High School Child-Care Course Musical Lesson
Practice Supported by a Junior College Faculty

Daiju MISAWA, Serika TAKAHASHI, Miho YASUKAWA

2017年9月6日受理

抄 録

高大接続・連携事業の一環として、保育の専門コースに於いて音楽表現の授業実践を3年間に亘り実施した。1回生と2回生に対して初回授業で実施した調査の結果から、保育コース生には何らかの音楽学習経験を持つ者がいる程度確認できるものの、鍵盤楽器の学習経験者は少なく全体として十分な経験を持つ集団では無いこと、義務教育段階の音楽的知識や能力が十分に身に付いていない者が多いことが示唆された。また、最終授業で行った授業評価アンケートの結果及び感想欄の記述を分析したところ、本授業実践は非常に高い評価を受けており、保育コース生に概ね受け入れられていること、授業外学修に関して今後の対策が必要であることが示唆された。その他、学修内容や構成に関して幾つかの課題が示された。

キーワード：高等学校専門学科、音楽表現、保育技術検定、高大接続・連携、
情報機器の活用

1. 緒言

平成27年4月、「子ども・子育て支援新制度」^[1]が本格的な施行を迎えた。時代は正に、保育界の転換期・変革期を迎えたと言っても過言ではなかろう。保育界の変革は、保育者養成への影響も大きく、保育所保育指針、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領の改訂や、新制度では集団保育のみならず家庭的保育者の養成が求められること等、従来の養成システムから次世代の保育界を担う人材養成のあり方を考えるべき時代を迎えたと思われる。

このような社会の流れを受けて、また近年の保育専門職を目指す学生の質的变化等

* 函館短期大学非常勤講師，函館大妻高等学校非常勤講師

** 函館大妻高等学校教諭

への課題も重なり、最近では、これまでの2年制中心の養成から4年制への転換を求める意見が聞かれるようになった。養成の期間延長が保育の質的向上に直接繋がるとの断定はしかねるが、比較的時間にゆとりがあり、十分な研究体制を以って学問に臨める4年制大学での養成には大いに期待が持てるところである。

一方で、我が国の高等学校の一部には、保育の専門学科等を擁し、将来保育職を目指す生徒たちに対して、保育現場での実習や子どもの発達と保育、表現技術等の保育に関する専門的指導が行われている。高校生の段階から大学等での免許・資格取得を見通しながら、保育の専門的知識や技術を学ぶことは、キャリア教育として期待できる他、保育者養成の質的向上や、保育職の人材確保といった今日的課題に対する、4年制大学での養成とは異なる観点からの可能性を示すものである。

この度筆者らは、高大連携・接続事業¹の一環として、函館大妻高等学校家政科子ども文化コースに於いて音楽表現に関する授業を担当し、3年間に亘り指導を行った。本稿では、筆者らによる授業実践を報告するとともに、保育コース1回生及び2回生の基礎的音楽知識・能力の実態と授業評価アンケートの分析を通して、本授業実践の成果を概観しようとするものである。

2. 実践概要

筆者らが授業実践を行った函館大妻高等学校（以下、実践校）は、北海道函館市に所在する私立の女子校である。1924年に創立され、特に家政科は開学以来の伝統を持つ^[2]。平成25年度には、その家政科の中に保育を専門とする「子ども文化コース（以下、保育コース）」を設置した。カリキュラムの関係上、コース別の授業が本格的に開始されるのは2年次以降であることから、筆者らの授業実践は保育コース1回生が2年生に進級した平成26年4月より実施することとなった。

筆者らは、正科の授業である「子ども文化演習（学校設定科目、第2・第3学年各3単位）」を担当した。週3時間の授業を短大側の音楽教員3名が分担しながら実施し、授業には高校側の家庭科教諭が補助教諭として参加した。「子ども文化」とは、専門教科「家庭」を構成する科目の1つであり、その目標は「子どもと遊び、子どもの表現活動、児童文化財などに関する知識と技術を習得させ、子ども文化の充実を図る能力と態度を育てる」^[3]ことである。実践校の場合、「子ども文化」に関する科目として「子ども文化（専門教科、第2・第3学年各2単位）」「子ども文化実習（学校設定科目、第3学年3単位）」と本科目の計3科目が開設されている。

また、保育コースでは、卒業時の到達目標として全国高等学校家庭科教育振興会が主催する全国高等学校家庭科保育技術検定（以下、保育技術検定）1級の合格を掲げている。実践校側からの要望もあり、筆者らの授業実践はこの検定試験に対応した学修内容（ピアノ実技、音楽理論等）を中心に構成することにした。具体的には、検定4種目のうち「音楽・リズム表現技術」の合格を目指し、音楽に関する知識や能力を

¹ 函館短期大学と実践校による教員レベルの連携事業。音楽及び造形分野の短大教員が授業を担当した。

涵養することを到達目標とした。表1は、検定（音楽・リズム表現技術）の出題のねらい及び平成27年度に於ける両学年の到達目標を示したものである。この表から分かるように、3級の検定ではピアノ演奏及び歌唱の実技試験が実施されるが、音楽・リズムに関する知識（筆記試験）は課されないことや、後述する音楽学習経験に関する調査結果を踏まえて、2年次の授業は実技指導を中心に構成した。具体的には、週3時間の授業時間のうちピアノ演奏の指導を週2時間、歌唱中心のソルフェージュの指導を週1時間実施することを基本とした。また、検定試験の終了後には、次年度の検定試験（2級、1級）に向けた音楽理論の予備学習と、簡易なリトミックや表現遊びを体験する機会を数回設けた。ピアノ実技の中心教材は、毎年検定の課題曲となるバイエルピアノ教則本を用いた。授業時間内での個別指導には限界があるため、基礎の段階では電子ピアノが人数分用意された教室で集団型の指導を行い、両手5指がある程度動かせるようになった段階で、小グループによる個別指導を実施した。一方、2級及び1級の試験では、音楽理論の筆記試験や弾き歌いといった比較的高度な音楽知識や技術が求められることから、3年次の授業では基礎的な楽典（音楽理論）の講義を週1時間、ピアノ演奏や歌唱・弾き歌いの実技指導を週2時間実施することを基本とした。音楽理論の講義に関しては、各級ともに検定試験実施迄の授業回数が10回程程度しか確保できないことから、情報機器を積極的に利用することで生徒が理解を深められるよう工夫した。授業は情報処理室で実施し、プレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint 2013）による音楽理論の解説やMIDI音源の使用など視聴覚教材を利用した講義と、市販のドリル^[4]を用いた学習を展開した。音楽理論の講義を増やしたことで歌唱やソルフェージュに十分取り組むことが難しくなったが、音楽理論の授業中にも歌唱や弾き歌いの課題曲をソルミゼーションする等、実技指導の進捗状況を確認しながら適宜工夫した。ピアノ実技の指導方法や教材は、基本的に2年次と同様であるが、1級の試験に向けて弾き歌い教材（過去の課題曲）も使用した。また、検定試験の終了後には、合唱や簡易なピアノ連弾に取り組む機会を設けた。

表1 授業の到達目標及び保育技術検定（音楽・リズム表現技術）のねらい

学年	到達目標	保育技術検定（音楽・リズム表現技術）のねらい
2年生	保育技術検定3級程度の音楽能力の涵養	【3級】バイエルNo.30-47程度のピアノ演奏と歌唱（童謡・唱歌）の基礎的技術を検定する
3年生	保育技術検定2級及び1級程度の音楽知識・能力の涵養	【2級】音楽・リズムに関する基礎的知識及びバイエル難No.48-78程度のピアノ演奏の基礎的技術と歌唱（童謡・唱歌）による表現技術を検定する 【1級】音楽・リズムに関する専門的知識及びバイエルNo.79-104程度のピアノ演奏技術と弾き歌い（童謡・唱歌）による総合的な表現技術を検定する

（平成25年度全国高等学校家庭科保育技術検定指導要領・関係資料集^[5]より作成）

3. 方法

保育コース1回生及び2回生を対象に、授業実践前の段階に於ける基礎的音楽知識や能力及び音楽学習経験等の実態を掌握することを目的に、義務教育レベルの音楽基礎テストと、属性調査としてピアノ等の鍵盤楽器や部活動等の学習経験の調査を実施した。また、最終授業では、本授業実践の省察データの収集を目的として授業評価アンケートを実施した。ここでは、これらの調査及びアンケートの分析を通して、保育コース生の音楽的実態及び筆者らによる授業実践の成果を概観していく。

3.1. 音楽基礎テスト及び属性調査について

音楽基礎テストの対象者は、保育コースに所属する2年生（1回生26名、2回生16名）である。調査時期は、1回生が平成26年4月上旬、2回生が平成27年4月初旬で、何れも授業実践の初回に実施し、対象者の全員から回答を得た。テスト問題は10問（1問10点×10問＝100点）で筆者の三沢が作成した。実践校では芸術科「音楽」が開設されていないことを考慮し、本テストでは「義務教育で学んだ事項の定着がなされているか否か」を確認することに主眼を置き、テスト問題は小・中学校学習指導要領の範囲に準じて作成することにした。設問項目は以下の8項目である。なお、義務教育段階の音楽科に於いて学習すべき重要な内容の一つに、我が国の伝統文化や伝統音楽が挙げられるが、保育技術検定の出題範囲では無いことから、筆者らの授業実践でも学修内容の範囲外としたため、本調査でも取り扱わないこととした。

- ①楽譜の理解（楽譜と鍵盤の位置関係）
- ②楽譜の理解（調性の指摘）
- ③楽譜の理解（拍子記号）
- ④楽譜の理解（反復記号）
- ⑤読譜力・曲の知識（唱歌の楽譜から曲名を指摘する）
- ⑥音楽用語（速度標語）
- ⑦音楽用語（強弱記号）
- ⑧音楽用語（変化記号）

また、属性調査の項目は以下の2項目である。①に関しては、学習経験2年以上の者を集計の対象とした。②に関しては、部活動の経験者も含まれるため、学習経験の年数を問わず集計の対象とした。

- ①ピアノ等鍵盤楽器の学習経験
- ②鍵盤楽器以外の音楽学習経験（部活動を含む）

3.2. 授業評価アンケートについて

授業評価アンケートの対象者は、筆者らの授業実践を2学年継続して受講した生徒で、調査当日に欠席した者を除く1回生23名、2回生15名から回答を得た。調査時期は、1回生が平成28年1月下旬、2回生が平成29年1月下旬で、何れも最終授業の中で実施した。調査項目は以下の5項目である。項目①～④に関しては5件法による回答を求めた。項目⑤に関しては自由記述であることから、記述内容の分析には量的手法を取り、分析ツールとしてテキストマイニング・アプリケーション KH Coder

(ver3.Alpha.08m)^[6]を用いた。1回生と2回生の記述を別々にテキスト化し、作成したテキストをKH Coderを用いて形態素解析を行い、抽出語リストを作成した。その後、データの全体像を明らかにするために共起ネットワークを作成して特徴語間の出現パターンの類似性を確認した。また、テキスト化にあたり、意味合いが同一の語(「子供」と「子ども」等)に関して統一を図った他、誤字・脱字には修正を加えた。

- ①技術向上のための予習をしたか(授業・実技に対する取り組み)
- ②教員の説明の仕方は分かり易かったか(授業の進め方)
- ③授業により十分な技術を修得することができたか(授業・実技の構成)
- ④授業全体の満足度(総合評価)
- ⑤感想欄(自由記述)

4. 結果と考察

4.1. 生徒の基礎的音楽知識と音楽学習経験の実態

図1は、保育コース1回生の音楽学習経験率を示したものである。何らかの音楽学習経験を持つ者は8名(30.7%)おり、経験の内訳を確認したところ、部活動の経験を挙げる者が多く、ピアノ等鍵盤楽器の学習経験者は3名(11.5%)、複数の音楽学習経験を持つ者は2名(7.7%)である。また、図2には保育コース2回生の音楽学習経験率を示した。前年度と比較して保育コース生の人数自体が61.5%と減少しているが、何らかの音楽学習を持つ者は11名(68.8%)と飛躍的に上昇している。経験の内訳を確認したところ、ピアノ等鍵盤楽器の学習経験者は6名(37.5%)、複数の音楽学習経験を持つ者は3名(18.8%)であった。1回生と比べて2回生に音楽学習経験者が多いことの要因として、1回生はロールモデルとなる上級生が存在しない中でコース選択をせざるを得なかったこと、2回生には高校教諭から保育コースの情報が適切に提供されたり1回生がロールモデルとなったりしたことで、音楽が得意な生徒やある程度の音楽学習経験を持つ生徒が積極的に志願したものと思われる。しかし、2回生の段階でも鍵盤楽器の学習経験者は4割にも達しておらず、全体として十分な音楽学習経験を持つ者が少ない集団であることが窺える。これはピアノの演奏技術が求められる保育技術検定の合格を目指す上で、指導に困難を来すことを物語っている。

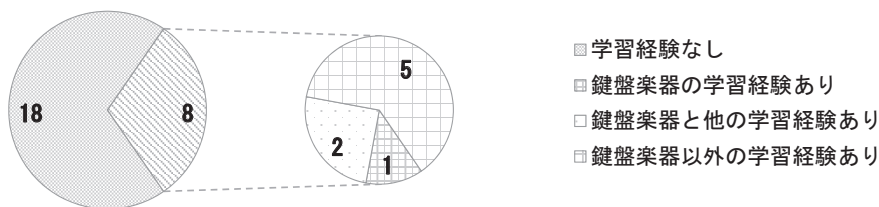


図 1 保育コース 1 回生の音楽学習経験 (数) N=26

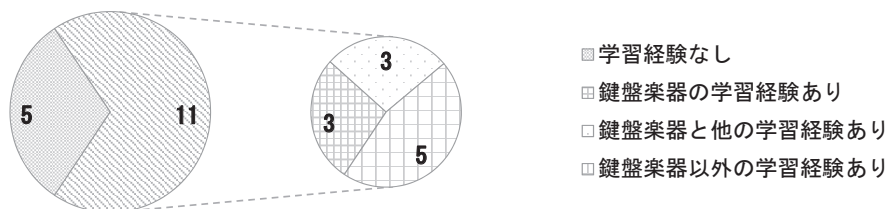


図 2 保育コース 2 回生の音楽学習経験 (数) N=16

表 2 は、基礎テストの平均得点率及び設問項目毎の正答率を示したものである。全体の平均得点率は 42.8% であり、全ての設問が義務教育の範囲であることを考慮すると望ましい結果とは言い難い。詳細を確認すると、音楽学習経験者の多い 2 回生の平均得点率の方が、1 回生の平均得点率を若干下回っている。しかし、その差は 0.6% と僅かであることから、両者の間に差は無いものと判断できる。設問項目毎の正答率を確認すると、①楽譜の理解（楽譜と鍵盤の位置関係）に関して、1 回生は 68.0%、2 回生は 91.7% の正答率を示しており、特に 2 回生に 9 割以上の高い得点率を確認することができる。一方で、⑦音楽用語（強弱記号）に関しては、1 回生は 80.8%、2 回生は 25.0% と正答率に大きな差が認められ、⑧音楽用語（変化記号）に関しても 1 回生の正答率が 2 回生の正答率を大幅に上回っている。また、②楽譜の理解（調性の指摘）、⑤読譜力・曲の知識、⑥音楽用語（速度標語）に関しては正答率が極端に低く、特に②に関しては 1 名も正答できなかったことが分かる。以上から、保育コース生の基礎的音楽知識・能力に関する平均得点率は全体として十分なものとは言えないこと、設問項目毎の正答率は調査年度により大幅な差が見られる項目が多いこと、読譜力・曲の知識、調性の指摘、速度標語に関しては正答することが難しい者が多く、特に調性の指摘に関しては 1 名も正答することができなかったことが明らかとなった。

表 2 基礎テストの平均得点率及び設問項目毎の正答率 (%)

項目	1 回生 (N=26)	2 回生 (N=16)	平均
①楽譜の理解 (楽譜と鍵盤の位置関係)	68.0	91.7	79.9
②楽譜の理解 (調性の指摘)	0.0	0.0	0.0
③楽譜の理解 (拍子記号)	46.2	43.8	45.0
④楽譜の理解 (反復記号)	23.1	25.0	24.1
⑤読譜力・曲の知識	11.5	0.0	5.8
⑥音楽用語 (速度標語)	3.9	18.8	11.4
⑦音楽用語 (強弱記号)	80.8	25.0	53.0
⑧音楽用語 (変化記号)	61.5	37.5	49.5
平均得点率	43.1	42.5	42.8

4. 2. 授業評価アンケートの結果

表 3 は、1 回生に於ける授業評価アンケートの項目①から④の回答結果を示したものである。この表を確認すると、②授業の進め方、③授業・実技の構成、④総合評価の 3 項目で平均値 4.7 と非常に高い評価である。回答の内訳を見てみると、3 項目の全てに於いて評価 5 が最も多く、更には全員が評価 4 または 5 と回答していることが分かる。一方で、①授業・実技に対する取り組みの項目に関しては平均値 3.8 となり他の 3 項目と比較して低い評価である。回答の内訳を見てみると、評価 5 の回答者が 1 名 (4.3%) 見られるが、評価 4 の回答者が最も多く 17 名 (65.4%) である。また評価 3 の回答者が 4 名 (17.4%)、評価 2 の回答者も 1 名 (4.3%) 確認される。

表 4 は、2 回生に於ける授業評価アンケートの項目①から④の回答結果を示したものである。この表を確認すると、1 回生と同様に、②授業の進め方、③授業・実技の構成、④総合評価の 3 項目で平均値が高い。一方で、①授業・実技に対する取り組みの項目に関しては平均値 4.3 となり、1 回生に於ける同項目の平均値と比較した場合には上昇が認められるものの、他の 3 項目と比較した場合には評価が低いことが分かる。このように、授業アンケートの項目①から④の回答には 1 回生と 2 回生に共通する傾向が伺える。

以上から、筆者らによる授業実践が全体として満足度が高く生徒たちに受け入れられていること、授業外学修に関しては改善の傾向にあるものの、十分な授業外学習を促すには至らなかった生徒の存在も確認されることが明らかとなった。

表 3 保育コース 1 回生の授業評価アンケート結果 (数) N=23

	評価 5	評価 4	評価 3	評価 2	評価 1	平均
①授業に対する取り組み	1	17	4	1	0	3.8
②授業の進め方	17	6	0	0	0	4.7
③授業・実技の構成	16	7	0	0	0	4.7
④総合評価	16	7	0	0	0	4.7

表 4 保育コース 2 回生の授業評価アンケート結果 (数) N=15

	評価 5	評価 4	評価 3	評価 2	評価 1	平均
①授業に対する取り組み	6	8	0	1	0	4.3
②授業の進め方	11	4	0	0	0	4.7
③授業・実技の構成	10	4	1	0	0	4.6
④総合評価	11	4	0	0	0	4.7

次に、項目⑤の自由記述に関して確認すると、1 回生と 2 回生を別々に分析した結果得られた「総抽出語数」は、1 回生が 2261 語、2 回生が 1131 語である。また、何種類の語が含まれるかを示す「異なり語数」は、1 回生が 395 語、2 回生が 252 語である。1 回生と 2 回生では回収データ数が異なるため一概に比較することはできないが、2 回生の方が 1 回生よりも回収データ数に対する総抽出語数が大幅に少ないことが分かる。これは、1 回生一人ひとりの記述量の方が 2 回生よりも多い可能性を示している。一方、異なり語数の差に関しては、両者の回収データ数に対して大差は無いものと言える。

表 5 は、形態素解析の結果得られた抽出語のうち、頻出上位 10 語を 1 回生と 2 回生を別々に示したものである。この表を概観すると、一般動詞の「思う」以外では「自分」「授業」「先生」「ピアノ」「弾ける」の 5 つの語が共通に確認できる。また、1 回生には「頑張る」「練習」「弾く」「分かる」という語が確認できるが、2 回生側にこれらの語は無く、代わりに「楽しい」「歌」「曲」「良い」という語が確認できる。以上から、感想欄の記述には両者に共通する傾向があり、それはピアノ実技或いは授業や筆者ら（先生）に関連する記述であること、その傾向は特に 1 回生に強く、2 回生に関しては授業の楽しさや歌唱の学習に関しても記述しようとしていることが推察される。

図 3 は、1 回生の抽出語の関係を検討するため、出現回数 7 回以上の語を特徴語として作成した共起ネットワークである。共起ネットワークとは、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークのことで、強い共起関係である程太い線で結ばれ、出現回数の多い語である程大きな円で描画されている。この図を確認すると、全ての語が複数の線で結ばれており、記述の内容がある程度多元的であることが窺える。語と語の関係強度が強くて出ているのは、①「思う／ピアノ／頑張る／ありがとう」というピアノ学修に関する分野、②「先生／授業／分かる／教える／良い」という筆者らの授業

実践や指導方法に関する分野, ③「弾ける／弾く／自分／嬉しい」という自分自身のピアノ演奏に関する分野, ④「楽しい／難しい」の4分野である。ここで, 前述した共通語の一つ「ピアノ」を実際の記述の中で確認したところ, 「2年間で, こんなにもピアノが弾けるようになるとは思わなかったです。」「初めてピアノに触れたので全くできない状態でしたが, このピアノの授業と家での練習で結構上達することができましたと思います。」「ピアノが初めてで毎日辛いなど正直思いましたが, 両手で弾けるようになり大学で活かせるのでとても嬉しいです。」等, 中心的な学修内容であるピアノ実技に対して, ある程度の成果を自覚していると思われる記述の中に出現していることが分かった。

図4は, 2回生の抽出語の関係を検討するため出現回数5回以上の語を特徴語として作成した共起ネットワークである。この図を確認すると, 図3と同様に全ての語が複数の線で結ばれていることが分かる。このことから, 2回生の記述の内容に関しても, ある程度多元的であることが窺える。語と語の強度関係が強く出ているのは, ①「弾ける／思う／最初」というピアノ演奏に関する分野, ②「楽しい／ピアノ／授業／曲」というピアノ学修を中心とした授業に関する分野, ③「自分／分かる」という自己の能力向上に関する分野, ④「検定／良い」という保育技術検定に関する分野の4分野である。ここでも, 共通語の一つである「ピアノ」を実際の記述の中で確認したところ, 「ピアノの基礎が学べて少しずつ曲が弾けるようになるのが楽しかったです。」「最初はピアノが弾けず進められない所もあったけれど, やってきて楽しかったし, ためになりました。」等, 1回生の記述と同様に中心的な学修内容のピアノ実技に対して成果を自覚していると思われる記述の中に出現している。また, 成果の自覚までに至っていないものの, 「ピアノの授業が一番楽しかった。」「ピアノはやっぱり難しいと思った」等, ピアノ実技に対する率直な感想の記述も確認された。

表 5 記述中の頻出語上位 10 語

1 回生 (H28) N=23		2 回生 (H29) N=15	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	34	弾ける	15
ピアノ	24	楽しい	14
先生	17	思う	13
弾ける	15	授業	13
頑張る	14	ピアノ	11
授業	14	歌	10
練習	14	自分	9
弾く	13	曲	8
自分	11	先生	8
分かる	11	良い	7

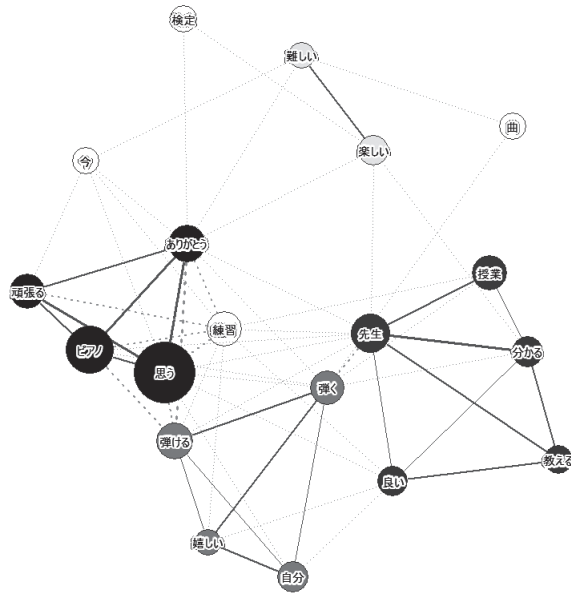


図 3 授業の感想に関する記述の特徴語共起ネットワーク（1回生）

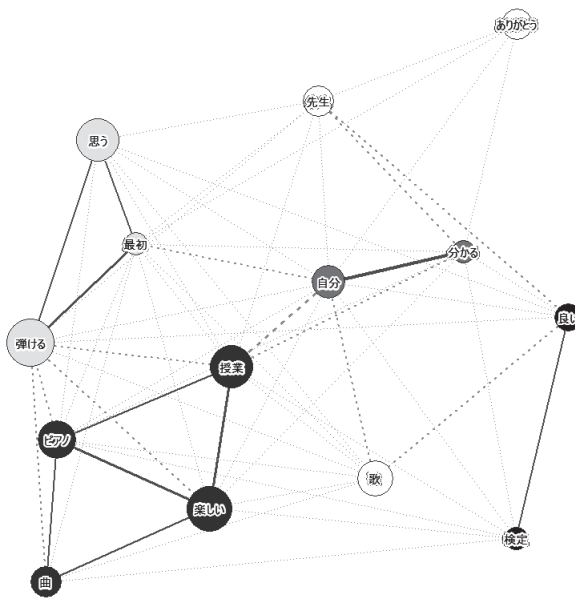


図 4 授業の感想に関する記述の特徴語共起ネットワーク（2回生）

5. まとめ

保育の専門コースに所属する高校生に対して、保育技術検定に対応した音楽表現に関する授業を実施した。授業初回に行った調査結果では、何らかの音楽学習経験を持つ者はある程度確認されたものの、ピアノ等鍵盤楽器の学習経験者は少なく、2年間で保育技術検定1級合格を目指す上で十分な経験のある集団では無いこと、音楽基礎テストの平均得点率から、義務教育段階の音楽的知識が十分身に付いていない者が多数いる可能性が示された。設問項目毎に得点率を確認したところ、調性の指摘の設問には1名も正答者が無く、読譜力・曲の知識や速度標語に関しても正答が難しい段階にあることから、これらの項目に関して授業実践の中で十分に取扱う必要があることが示された。授業評価アンケートからは、授業の進め方、授業・実技の構成、総合評価の3項目で高い評価を受けていることが明らかとなった。授業外学修に関しても決して低い評価では無く、2回生に関しては改善の傾向が伺えるものの、自己学修を促すには至らなかった生徒の存在も示された。また、感想欄の記述の特徴を確認したところ、1回生と2回生の頻出上位10語のうち「思う」「自分」「授業」「先生」「ピアノ」「弾ける」の6語が共通語として確認され、共起ネットワークにはピアノ学修や演奏に関する分野と授業に関する分野が共通に確認された。

授業評価アンケートの結果から、筆者らの授業実践は生徒らに概ね受け入れられたものと思われる。但し、授業外学修に関しては今後も改善を目指し対策を講ずる必要がある。感想欄の記述から、生徒らは特にピアノ実技に関して深い学びを得たことを推察するに至った。一方、本授業実践では歌唱やソルフェージュ、音楽理論等も学修内容として扱っており、ピアノ実技を中心に授業を構成したことで、これらの学修の定着が十分に図れなかったのだとしたら反省すべきである。また、「子ども文化」という科目にとって音楽表現は学修内容の一つに過ぎず、様々な子どもの表現活動や子どもと遊びの関係についても学修することが、本来の在り方であろう。現状では、保育の専門学科等に於ける音楽表現の学修内容が十分に討議されていない。この点に関しては、音楽表現の分野に限らず全ての保育内容を包括した専門家レベルでの検討が必要であろう。尚、保育技術検定の内容には、過度に難解な設問がある場合や実技課題に対して疑問点がある。今後、保育士試験（国家資格試験）の出題に段階的に対応させる等の改善が必要だと考えるが、この件に関しては紙面の都合で別の機会とする。

引用・参考文献

- [1] 内閣府 (2014). 子ども子育て支援新制度 内閣府ホームページ Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html> (2017.8.25 閲覧)
- [2] 函館大妻高等学校 (2007). 学校沿革 函館大妻高等学校ホームページ Retrieved from <http://hakodate-otsuma.ed.jp/> (2017.8.25 閲覧)
- [3] 文部科学省 (2010). 高等学校学習指導要領解説 ― 家庭編 ― 開隆堂出版
- [4] 池田 奈々子 (2007). 書いて覚える徹底 楽典(2) ドレミ楽譜出版社
- [5] 全国高等学校家庭科技術検定委員会 (2013). 平成 25 年度全国高等学校家庭科保

育技術検定指導要項・関係書類集 全国高等学校家庭科教育振興会

[6] 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための量的テキスト分析 — 内容分析の継承と発展を目指して — ナカニシヤ出版

付記

本論文で使用したデータの一部は、日本保育学会第 68 回大会、国際幼児教育学会第 36 回大会、全国保育士養成協議会第 55 回研究大会の各大会で発表した研究成果に基づき、新たに分析を加えたものである。